

断章 旭川のアイヌ語地名研究

35

高橋 基

前回まで、「旭川」村の地名起源を見てきたが、百二十年前の明治二十三年九月二十日に、旭川村と永山村が誕生したのであるが、この二つの村の境界になったのが、この牛朱別川である。永山村の村界を庁令六一号で確認すると、「南ハウシシュペツ川、北ハ石狩川ヲ界トス」とあり、南の旭川村との境界は、「ウシシュペツ川」と明記している。

—牛朱別川のアイヌ語名(上)—

さて、旭川村と永山村の境界線となった牛朱別川の明治二十三年から、百二十年の歴史の中で、最大の出来事は、牛朱別川の川口、すなわち、石狩川との合流点の切り替え工事である。掲載図は、昭和五年発行の『旭川市全図』で、切り替え工事は、この年着工し、翌六年十一月竣工、昭和七年十月には、旧牛朱別川の埋め立て工事も完了(付帯工事は十五年)。図のように、現・JR宗谷本線鉄橋から旭橋に新たに流路を掘削し、築堤した大工事であった。切り替え後の旧牛朱別川の現・十条十二丁目から現・ロータリーを通り、現・四条西二丁目へ流れ、現・七条西六丁目あたりで石狩川に合流していた流路を埋め立て整地した。その結果、旭川市街地の西



部の街並みは一変したのであった。ところで、掲載図の現在の金童町から十条九丁目にかけて「境界線(←)」が書かれている。永山村が設置された明治二十三年には、石狩川の分流がここを流れていて、現在の十条九丁目あたりで、牛朱別川と合流していたのである。したがって、ここが永山村と旭川村の境界であったのである。

さて、丁度、旭川村と永山村

が誕生する明治二十三年の三月に、永田方正は、旭川のアイヌ語地名を調査した。翌明治二十四年に、『北海道蝦夷語地名解』で、牛朱別川について、次のように地名解をした。

「ウシシュペツ (ushishi

pet 蹄川) — 鹿跡多キ川

○上川アイヌ某云フ、「ウシシュペツ」ハ、「イシシュペツ」ニテ雪水多ク下リ陸ニ氾濫スルヲ以テ名ツクト」

牛朱別川は、この川のはとりに鹿の蹄の足跡が多かったので、「ウシシュペツ (ushishi-pet)

(pet—川)と名付けられたという。

掲載図中の旭川中学校(現・旭川東高)の教員だった磯部精一は、『北海道地名解』(大正七年刊)で、次のように述べている。

「牛朱別(ウシシ、ペツ)蹄の川の義—ウシシは、「蹄」の義にて、牛馬鹿等何れの蹄を意味するものなるが、此処にては、「鹿の蹄」を意味する由なり。昔時此辺には、鹿の群棲したるを以て、今より二十年前には、旭川中学校の裏辺にて、鹿の角を拾ひしこと往々ありしといふ。」

二十年前の明治三十一年は、旭川中学校の敷地から牛朱別川河畔までは、上川農事試作場であった。往時は鹿が群棲し、上川農事試作場で鹿の角を往々拾ったとの伝聞が披露されたのであった。これは一例である。

鹿はアイヌの人たちにとっては、鮭同様に重要な食料であり、毛皮は衣料や寝具、角は鉄の代用品で鋏になり、矢先になるなどアイヌの人たちの生活と切り離すことのできない関係にあった。牛朱別川はその鹿の群棲を象徴する河川名だったのである。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します